パネルディスカッション

森･川･湖の統一的な流域政策へ

コーディネーター
宮浦　富保
パネリスト
山口美知子、須藤　護、松尾扶美、山下直子、田中　滋、林　珠乃

司会者（宮浦氏）

最初に、本日のパネラーの方々をもう一度紹介させていただきます。龍谷大学社会学部の田中滋さんには「なぜ愛知川流域を研究するのかと」というご講演をいただきました。東近江市市民環境部森と水政策課の課長補佐の山口美知子さんには「鈴鹿山脈から琵琶湖までつながる東近江市～森おこしプロジェクト～」というご講演をいただきました。龍谷大学の名誉教授であり、里山学研究センター・フェローの須藤護さんには「小椋谷と木地屋」というご講演をいただきました。東近江市永源寺森林組合技術職員の松尾扶美さんには「東近江市：里山整備の現場から」というご講演をいただきました。森林総合研究所主任研究員の山下直子さんには「東近江の森林資源～特徴と利用可能性」というご講演をいただきました。そして本日はポスターの展示をしていただきました龍谷大学の教員であり、里山学研究センターのメンバーである林珠乃さんです。林さん、ポスターの内容を説明してもらえますか。

林氏

龍谷大学の林です。里山学研究センターでは主に景観に注目して研究を行っています。皆さんのお手元に、「琵琶湖瀬田川流入河川の集水域と行政界」という資料（図１）があると思います。琵琶湖瀬田川には118の河川が流れ込んでいます。田中先生のお話では流域、つまり集水域を意識することが大切だということでしたが、それぞれの集水域がどのような特徴を持っているのかということについて類型化する内容の資料です。滋賀県には他の県にないすごい宝物のような資料があります。明治10年から12年くらいにかけての滋賀県の産業や社会構造や自然環境を、滋賀県内1400の村のそれぞれについて記載した「滋賀県物産史」という文書です。全国的に見ても珍しい文書だと思います。この文書のデータをまとめて現在の地図の上に再表現して、当時の自然環境、つまり身近な自然を使って生活をしていた頃の景観を、現在そこに住んでいる人が見て取ることができるようにする作業に取り組んでいます。学生さんにも手伝ってもらって作業を進めていますが、今のところ、当時の愛知郡、神崎郡、蒲生郡についての作業が終わっています。ポスターでは、愛知郡、神崎郡、蒲生郡の一部のデータを紹介していますので、この後、時間があるようでしたら、皆様も是非ご覧になってください。

司会者

議論を始めるにあたって、本日のテーマである愛知川流域の地理的特徴や歴史的特徴について、皆さんのお考えを再度確認しておきたいと思います。講演内容の補足でも結構ですし、水や木材、燃料などの資源利用との関わりについての補足でも結構です。

山口氏

大変贅沢なシンポジウムだったと思います。どの方のお話を伺っても、歴史的な背景があって現在の東近江の景観、人のあり様、産業のあり方がつくられてきたのは間違いない、ということがよく分かりました。

田中先生と事前に打ち合わせをさせていただいた時に、東近江はわざとこの１市６町が合併をしたんじゃないかと先生から言われまして。「さすがにそれはないと思います」とは言ったのですが、あとで調べれば調べるほど、もともとそれらの地域にはさまざまな繋がりがあったことがわかり、もしかしたら人々の無意識の中では合併が必然であったのかもしれないと思うようになりました。あらためてそうしたことを確認させていただいたシンポジウムだったと思います。

須藤氏

今日のシンポジウム、私にも色々と勉強させていただいた部分が非常に多かったと思います。そういう意味で、自然科学分野との学際的研究を進めていく基盤ができつつあると考えています。例えば、木地屋がどういう木を使っていたかというと、私が聞くかぎりでは、ほとんどがブナなんですね。ブナは標高600～700メートルくらいから上に群生するので、木地屋にとって非常に都合のよい樹木ということですね。ブナよりかなりいいのがトチなんですね。ところがトチというのは大きな実がなりますので、山村の非常に重要な食料になるわけですね。ですからなかなか伐れなかった。更にいいのはケヤキなんですけど、ケヤキは硬いんですね。ですからよっぽど刃物が良くないときれいなものはできない。ということで、主にブナが利用されていた。

ところが先ほどの山口さんのお話の中でブナは一言も出てこないんですね。それはなぜなのかというと、最初は伐り尽くしてしまったのかなと思ったんですけど、実はそうではなくて、木地屋の木の伐り方、選び方というのは、お椀にならないような木は選ばないんですね。ですから、筋がスッと通った、しかも100年以上たった大木を選ぶわけですね。それで奥山に移動するわけですけども、その時に「マサミ」というのをやります。木の表皮を剥がし、そして一回割ってみて、きちんと割れるかどうか。割れなかった場合には、その木は伐らないんです。だから残るはずなんですね。曲がった木は残るはずなんですけど、残っていません。これは私にとって一つの大きなヒントになったんですけど、小椋谷にいつごろまで木地屋がいたのか、それからいつ頃からいなくなったのかを知るための基準として、樹木のことをもうちょっと研究してみたいと考えています。

私自身勉強になったことは、この小椋谷のいわゆる奥山に生えてる木を、先ほど山口さんのデータを見ながら、ちょっとピックアップしてみましたら、ケヤキがありました。イタヤカエデ、ヤマモミジ、それからコハウチワカエデがあります。これらは非常に高級品として使われたものですので、この辺りから、またブナの問題を考えていけば、小椋谷における木地屋の歴史を樹木のほうから見ていくことができるのかなと思いました。大変参考になりました。

松尾氏

今日お話を聞かせていただいて、私も大変面白く感じました。普段歴史とか全然関わってなかったんですけど、自分たちの作業しているすぐ近くから縄文のビーナスとか出てきています。私たちが作業させてもらってる五個荘の山でも古墳が時々見つかっています。作業道を作るのには困るんですけど、古墳があるというのがすごく面白く感じます。私は福岡出身で、この地

域とは全く関係なく、まだ来て2年ですけれども、とても面白い所に来たと思ってます。森林組合でもこの地域ならではの関わりができたらいいなと思います。

山下氏

松尾さんは九州のご出身ということですが、私は北海道出身で。全く歴史観がないと言ったら言い過ぎですけれども、せいぜい200年くらいの歴史しかない所で。学生の頃に日本史を学んで、信長や古墳時代といっても遠い別の国の話だなというように感じていたんですが、滋賀に移り住んで、またこのプロジェクトをやるようになって、あっ、あの地名はここだったのか、と思うことがあります。さらに自然科学分野ですと、あまり歴史と結びつかないと思っていたのですが、実際に研究を始めてみると、この山は昔どのような使われ方をしてたんだろうと考えることがよくあります。その履歴に応じて今の山があるわけですから。こうして自然に歴史を知りたくなり、いろいろ調べてきました。自然科学分野と人文科学分野が本当に繋がりあって、歴史を理解した上で、今の森林を理解することが本当に大切だと感じております。

林氏

愛知川流域の地理的特徴と歴史的特徴ということですけれども、スクリーンに映しているのは滋賀県の地質図（図２）なんですが、大きく分けて4つに分かれます。付加コンプレックス、堆積岩類、火成岩、深成岩です。青色が火山岩で、この濃い色は流紋岩です。この東近江というのは大体この辺りですが、県内で流紋岩、火山岩があるのはこの辺りだけなんですね。この流紋岩、火山岩は、地形的には湖東島状山地と言われるものなんですけれど、さっきすこし話に出てきたここの蓋山とか、それからこの長命寺のとことか、沖島とか、そういう場所なのですが、その辺りの地質は火山岩です。ですから、この図を見ると、ここに湖東のこのエリアの宗教的シンボルになっている山があります。それからもう一つ、経産省に指定されている滋賀県の伝統工芸品に近江上布があります。これがその流紋岩の湖東島状山地ですが、近江上布はカルデラの内側のところで生産や加工が行われています。ここのところに愛知川の伏流水が湧き出て、それがこの産業に必要だったのですね。こういうふうに地理的な、あるいは地質的なこのエリアの特徴が、この地域の宗教的、文化的なものだとか、産業的な基盤などの歴史的特徴と結びついているわけです。

司会者

配付資料の中にメモを入れてあります。『琵琶湖流域を読む』という上下巻の本から抜き出したメモです。山口さんの話の出だしのところでもお話がありましたし、先ほど林さんのお話にもあったんですが、7,000万年前に噴火したカルデラ。この大きなカルデラの中に、東近江市がすっぽり入っていることを示したメモです。参考にしてください。湖東流紋岩は花崗岩みたいに固くて、非常に加工性のいい石材としてこの辺りで使われていたということも記してあります。

今日のテーマである愛知川流域を研究することの意義について、特に愛知川流域のほぼ全部が東近江市に属するということの意義について、田中さんと山口さんからお話しをいただきたいと思います。

田中氏

東近江市に愛知川流域が収まっていることのプラスとマイナスについて少し述べてみたいと思います。一つの市町村に流域が収まっているのは、複数の市町村に分かれている場合に比べて、当事者意識が、例えば行政にしろ、市民にしろ、生まれる可能性があるのだろうと思いま

す。一方、別の市町村に分かれてる場合には、対抗心や敵対心が生まれて、たとえば彼らが何もしないから我々はこんな目に遭ってるんだといったような不毛な対立図式を生んでしまう可能性もあります。

愛知川流域が東近江市に収まっていることのプラス面としては、東近江市の行政なり市民なりが当事者意識と責任感を持って、統一的な政策の下でこの流域に関与できる可能性を高めるだろうということが挙げられるわけですね。

マイナスについて考えると、流域がいくつかの市町村に分かれている場合には、対立するのではなく協力できたときには、人材のストックっていうんですかね、たとえば、A、B、Cという三つの市町村が、みんなそれぞれに人材を持ち寄れるというそういう可能性があります。

東近江市は合併してできたのですが、たとえば、行政支所という形で残っている永源寺町には以前のようなマンパワーはないわけですね。一つの市や町で流域全体の問題に取り組む場合には、行政内部でマンパワーをどのように調達する仕組みを作り出すのかが課題になります。

合併して流域に対して統一的な施策を講じる可能性が生まれたけれども、それを遂行するマンパワーが不足するという問題ですね。

それから、国とか県の関与についてですが、幾つかの市町村に分かれている方が引き出しやすいのか、合併して一つの市になっている方がいいのかというのは、私には分かりかねますので、そのあたりに詳しい山口さんにお伺いしたいと思っています。

山口氏

先ほど田中先生から、繋がりながらも分断されているというお話がありましたけれども、先日ある方が、物流というのは差があるから生まれる、ということをおっしゃっていました。本当にその通りなんですね。地方創生というと、一歩間違えると、つい地域の中で全てのことを完結させて、地域の中で物もお金も人も全て回そうということだけに特化してしまいそうになります。先日、富山県南砺市の方で日韓のフォーラムにお邪魔をしてきた時に、韓国のタムヤン郡の辺りの景色と滋賀の景色というのはそっくりなんだそうです。古くから大陸や朝鮮半島から渡ってこられた方々が滋賀に住み着いた理由が分かる気がする、とおっしゃっている方もいました。近江という場所は、古くからいろんな人が行き来をし、住み続けてきた場所なんですね。

人の動き、物の動き、お金の動きっていうのは人の体でいうと血流みたいなもので、それが今東京にうっ血してるから問題になっている。だから地方創生で、地方がそれぞれ独立国のようなことをやり出したら、結局地方でうっ血するだけなんです。私たちがしなければならないのは、血流を作ることなんです。グローバル経済を全否定する必要はなくて、健全な血流の仕組みを地域の連携によって作っていくことができるのではないかと考えています。

中世の近江の人々がわざわざ八風街道を超えて商売をしていた頃のように、稼いだお金がまた社会へきちんと返ってくる仕組みをガバナンスに組み込むことができたら、本当に豊かな地域の姿をそれぞれの場所に作っていけるんじゃないかな、と思っています。

東近江では、流域が一つの自治体になったということで、いろんなことが考えやすくなりましたし、過去の人々の生き生きとした歴史がやっと見えてくるようなスケールになったと思います。同じような課題を持った地域の皆さんと連携し、活気ある地域づくりをするためには、先人に学びながら取り組むしかない。木地屋のお話にもありましたように、学ぶべきはやはりガバナンスだと思います。どのようなガバナンスを作っていくか、それこそが私たちに課せら

れている本当の課題だと感じます。

田中先生が国と県の関係について話をされましたが、現在の国は、モデルになる地域は直接応援するというスタンスに変わってきています。ですけれども、使っている言葉も知っている現場の知識も全く違いますので、国と協働するのはとても大変です。今度、国立環境研究所の琵琶湖分室が滋賀にできますよね。つい先日、たまたまそこに赴任される予定の研究者にお会いしたんですが、その研究者の方も、例えば生態系サービスの評価を議論したときには、じゃあ滋賀にどんな場所があるのか、という話になっていったわけです。それぞれの立場で、それぞれの皆さんが何とかしたいっていう思いはお持ちですので、共通の現場と共通の言語を作っていければ、国や県と手を組むことはそんなに難しくないと思っています。私自身は国の方とも、県の方とも一緒にいろんなことを共同でやっていきたいと思っています。

司会者

流域が一つの市町村に属するというメリットは最大限活用していただき、また今日の話に出てきた近江商人とか、木地師とかのように、別の階層でネットワークを作るというのもとても大事だと思います。また、愛知川流域だけで考えを閉じるのではなくて、別の流域とネットワークをつなぐことも大事だろうと思います。この辺りのことでさらにご意見がある方、お願いします。

須藤氏

今の話は正解だと思います。私の立場から申し上げますと、今は若い人の担い手がいなくて、お祭りや民俗芸能がどんどん消滅していってるんですね。ひどい所だと、国の重要文化財になっているのにもう来年からできないという状況になっています。ですから、そういうお祭りや民俗芸能をもう一度見直して、それを若い人たちが中心になって経験者に習って勉強していく環境づくりができないかな、と思います。

最初の田中先生のお話の4-2、これは県立大学の市川さんの研究を引かれたんだと思いますけど、水争いと祭り文化がありますね。やはりお祭りをやることで、周辺の村の人たちが一堂に集まるんです。そして、そのお祭りに芸能が付随していって、各地でそういうお祭りが復活していくと、いろんな所でいろんな人たちが集まるようになる。ここにもありますように、祭りというのはいわゆる水の争いとか境界の争いとか、そういうものの緩衝材になっているんですよね。昔からの人々の知恵が、お祭りとか民俗芸能にはびっしり詰まっているわけです。そういう意味で、若い人を盛り立てて、そういう芸能やお祭りを伝承できるような環境づくりをしていただければ大変ありがたいと考えています。

司会者

流域を考えるときに、奥山と里山を個別に扱うのではなくて、それらの有機的な繋がりを作る仕組みが必要ではないかと思うのですけれども、そういう仕組みを作るにあたって、課題や展望について発言していただける方はいらっしゃいますか。

山口氏

今日の山下さんと松尾さんのプレゼンを聞かせていただいたら、もう任せておいたら大丈夫かなという気がしたんですけども。去年のご縁をきっかけにお願いして開催していただいたのが、実はその森林の所有権に関するセミナーです。彼女も今すごく苦労されていると思いますが、実は私はどこへ行っても同じ悩みを全国の方から伺っているのですね。所有権をどう捉え、今後どう扱っていくのかという問題は、森林を今後どうするかという話と間違いなく切っても

切り離せない話ですので。奥山と里山を区別しないというのはもちろんなのですけれども、それぞれの対処法が違う可能性は高いです。私がプレゼンで話した、所有界をあまり確定せずに森林整備をするというのは、どちらかというと里山で有効な手段です。しかし、それを奥山でやろうとすると、やはり同じようなやり方ではできません。時代も変わっていますので、これは専門家の方にぜひ議論をいただきたいと思っているテーマの一つです。

司会者

会場から頂いた質問に幾つかお答えいただきたいと思います。東近江市で行っている取り組みは、過去に分断され、個別化されてきた日本の都市集落計画を再生する可能性が感じられます。そのためにもぜひ取り組みの普遍化を図ってほしいとのことですが、山口さんからコメントをお願いします。

山口氏

行政計画に盛り込むというのは、普遍的に今後続けていくとことの一つの意思表示というふうには思っておりますし、それ以外にもいろんなやり方があるとは思っております。正直に申し上げて、行政組織だけが問題を認識をしても、全く意味がないと思っています。今日いらっしゃる松尾さんとか、山下さんのような研究者とか、本当にいろんな方々が地域に関わり続けるようなことがなければ、どんなに絵を描いていても形になっていかないのです。そういうことがあるので、地域の皆さんと、どのようなことが、どうして必要かっていうことを常に共有していく努力をしていきたいと思っています。

司会者

次の質問です。環境という観点で良い広葉樹林というのはどういうものでしょうか。商業的な観点で良い広葉樹林と合わせた理想の広葉樹林というのは考えられるでしょうか。松尾さんいかがでしょうか。

松尾氏

私も山を見ながら試行錯誤しているところでして、里山林整備の意義についてよく先輩と議論しています。とくに、自分たちが扱っている山の将来は一体どうなるだろうって議論しながら仕事をしています。商業的によいというのは、おそらく有用木、つまり材として使える木、例えばサクラやクリ、コナラ、ケヤキなどのほか、今回苗木を作ったケンポナシとかハリギリとかの木を育てる畑のようなものかもしれません。

広葉樹は放っておくと光をめぐって競争して曲がりくねるので、畑のようにしてまっすぐ育てたほうが材としては使いやすくなると思います。生態学的観点でよい山というのは、実は私自身も里山の場合どこを目指したらいいか分からないのですが、やはり整備をして若返らせることからスタートして、どこかに落ち着けばいいんだろうと思ってます。

感覚的な意見ですけれど、水を保持する木というのが大事であると思っています。根を張り、水を保持する木です。私たち技術者も種ごとの特性を意識して、例えば根を張るマツとかケヤキなどの木がどこに生えているのか、沢なのか尾根なのか斜面なのか、そういう点をもっと見極められるようになって、いつか答えられるようになればいいなと思います。

司会者

最後の質問にしたいと思います。生物多様性の高い森林の再生を保証するような計画や、補助金に頼らないでも回る仕組みが課題だと考える方もいらっしゃいます。本日の山下さんのお話の最後のほうに、コナラという樹木があるからチョウの仲間の生物多様性が高いのだという

お話が出てきました。山下さんからご意見をお願いします。

山下氏

バランスが大事だと思うんです。経済林に関してはいろんな価値観があると思うんですけども、やはり今生きている世代のみんなでどういう林を育てたいかという価値観を共有して、そういう林を目標として作っていく。それが経済林だと思います。その何年か先、つまり自分の子供や孫の世代にもそれが必要とされる林になるのかどうかは、もう誰にも分かりません。それでも、今の価値観でやるしかない。

私たちが気をつけなければいけないのは、その資源を使い尽くしてしまい、次の世代に残す財産が何もない状態にならないようにすることです。そういう意味でも、生物多様性を含め、いろいろな面でバランスを保った森林を残すという責務があると思います。そのためには種の多様性、つまり種がどれだけ多いかという評価だけでなく、生態学的に繋がりを持った種がどれくらい共存できているかという、機能的多様性の評価がすごく重要になってくるわけです。例えば、この東近江の鈴鹿山系にはイヌワシやクマタカが住んでいるのですが、これらの絶滅危惧種が生息するには非常に高い木が必要であると言われています。また、それらの鳥が獲物を追うためには、落葉広葉樹林が必要だと言われています。クマタカは林内でも狩りができるけど、イヌワシは見通しがよい場所でなければ狩りができない。というように、短絡的に一つの面だけを見るのではなくて、いろんな方面から見て評価しなければいけない。それはとても大変な作業ではあるのですけれども、いろいろな専門家の方々と議論を重ねながら、生態学的な繋がりのあるバランスの良いネットワークをそなえた山づくりに取り組んでいく必要があると思います。

司会者

すみません、補助金の問題についてはもうコメントする時間がなくなりました。時間の制約上、議論を深めることができなかった点が多かったかもしれません。本日のシンポジウムでは流域についていろいろな観点から議論がありました。愛知川流域は渡来人の影響が強く、また近江商人や木地師を生んだ場所でもあります。永源寺ダムが建設されたことによる社会的な影響、下流域では琵琶湖総合開発の問題、それから所有と管理の問題など、いろいろな観点から流域の問題を考える必要があります。そうした宿題を残しながら、今回のシンポジウムを終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

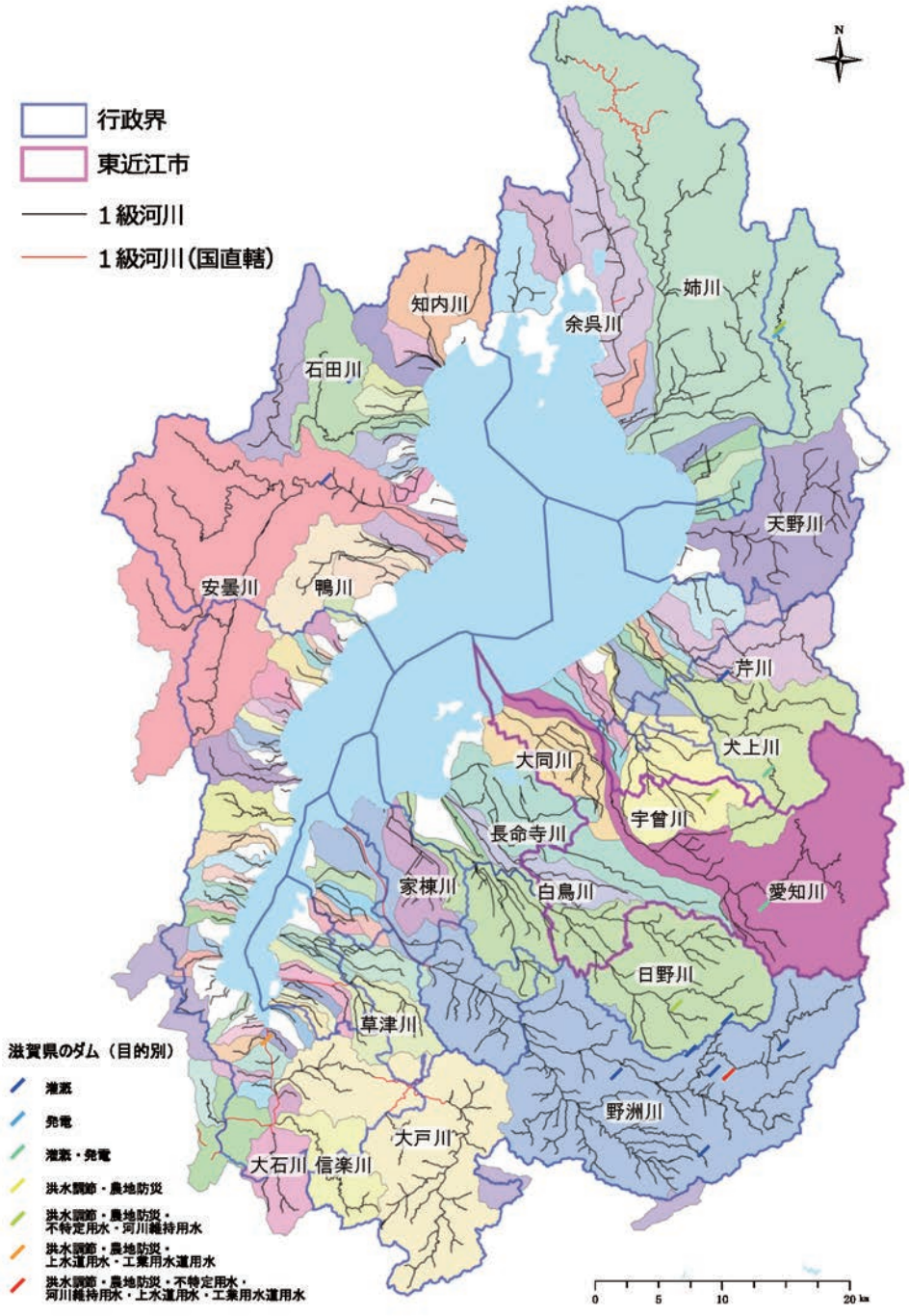

図１．琵琶湖瀬田川流入河川の集水域と行政界

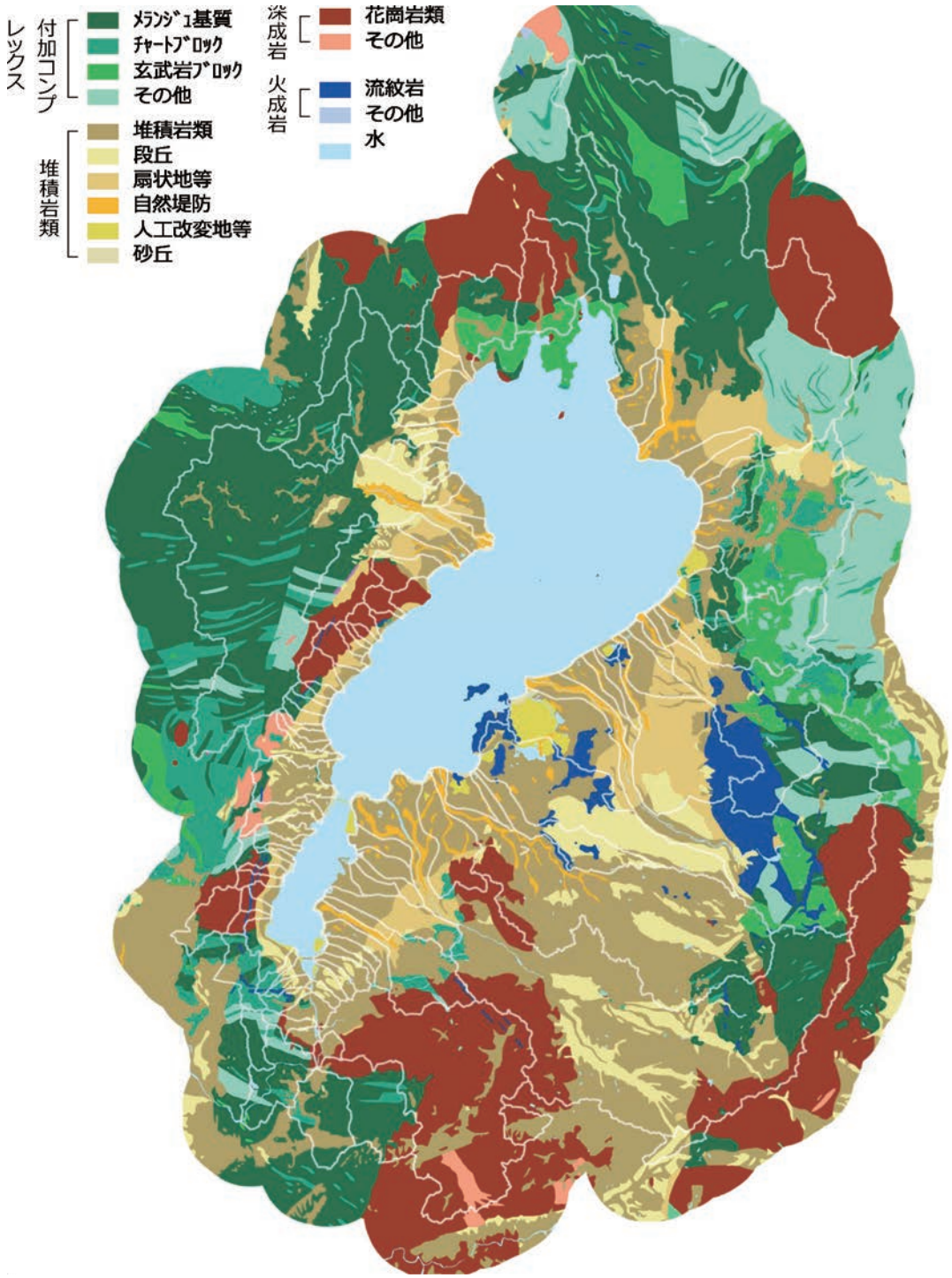
付加コンプレックス
メランジュ基質
チャートブロック
玄武岩ブロック
その他
堆積岩類
堆積岩類
段丘
扇状地等
自然堤防
人工改変地等
砂丘
深成岩
花崗岩類
その他
火成岩
流紋岩
その他
水

図２．滋賀県の地質図